

年 組 名 前 :

問1 小菅村は、どうしてドローンを使った住民への配達事業の常時運用を始めるのですか。

.....

.....

.....

.....

問2 「ドローンは一度に『幅A㊦』、『奥行きB㊦』、『高さC㊦』、『重さD㊦』までの荷物を運ぶことができます。①～④に入る数字を書いてください。

- ① 「 」
- ② 「 」
- ③ 「 」
- ④ 「 」

問3 ドローン配達事業のメリットとデメリットを考え、2つずつ挙げてください。

「メリット」 ①

②

「デメリット」 ①

②



倉庫「ドローンデポ」を通じて各集落の着陸場「ドローンスタンド」に配達するイメージ図

約350世帯が暮らす小菅村で4月から、国内初となるドローンを使った配達事業の常時運用が始まる。倉庫から各集落に設置した着陸地点まで配達し、住民

小菅でドローン配達

4月から運用、国内初

食材や日用品各集落へ

が受け取りに行くシステムを構築。倉庫に備蓄した商品は最短5分で届けられる。高層者や子育て世代をはじめ、住民の買い物の利便性向上が期待される。

村内にはスーパーがなく、住民は買い物で隣接する大月市に車で片道30分ほどかけて出向く必要があった。村は村民の利便性を向上させようと、昨年11月、産業用ドローン開発を手掛けるエアロネクスト（東京都）とドローンを利用した物資配達に関する協定を締結。エアロネクストと物流大手のセイノールホールディングス（HD、岐阜県）が業務提携を結び、ドローン配達の常時運用が実現することになった。

西社によると、4月までにセイノールHD関連会社に運輸トラックで届けられた荷物を集荷する倉庫「ドローンデポ」を整備。村内最大8カ所に着陸場「ドローンスタンド」を設置し、倉庫から荷物を配達する。宅配を依頼した住民は、メールなどで到着の通知を受けて近くの着陸場まで荷物を受け取りに行く。

配送サービスは「スカイハブ」の名称で実施。ドローンは基本的に設定された路線を自動飛行し、荷物をスタンダムで降ろして倉庫に戻す。幅35㊦、奥行き26㊦、高さ20㊦、重さ5㊦までの荷物を運ぶことができる。

（秋田大揮、松崎篤嗣）

4月の運用開始直後は、着陸場を1カ所に設置し、1路線のみで試験的に稼働する。順次、路線を増やすほか、住民の商品の注文状況を分析し、需要の高い調味料や洗剤などの日用品は常時倉庫に備蓄する。

船木直美村長は「全国では買い物に不便で少子高齢化が進む地域がある。小菅村がその課題を解決するモデル地域になる」と期待を込める。

セイノールHDの広報担当者は「ドローンによる配達の実用化は国内で初の試み。小菅村で成功すれば、今後、全国で展開していくサービスにしたい」と話している。